「Die Brücke 架け橋」第740号 令和７年２月１日発行（隔月刊）公益財団法人日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

Die Brücke 架け橋

日独協会機関誌

2025 2

表紙の言葉

2025 年欧州文化首都ケムニッツ

ドイツ東部のケムニッツ (Chemnitz) という町をご存じですか？ 2025 年の「欧州文化首都」に選ばれた町です。観光的には、産業遺産の町であるとともに、木彫り人形などのクリスマス文化の揺籃の地エルツ山地（世界遺産）の玄関口です。ケムニッツに宿泊して、例えば世界遺産の鉱山とクリスマス木工細工の町アナベルク・ブーフホルツを訪ねましょう。中世以来、危険極まりない鉱山の労働者を見守り続けてきた古い教会や、閑散期の鉱夫たちが発展させてきたクリスマス木工細工の数々を見ることができます。鉱山文化という今は失われた産業文化に触れることで、奥深いドイツ近代文化の一端に触れることができますよ。2025 年に欧州文化首都になることで、伝統文化以外のダンスミュージックなどの現代ドイツ文化に触れられるチャンスもあります。

公式サイト：https://chemnitz2025.de/

大畑 悟
（ドイツ観光局広報マネージャー　日独協会会員）

写真 © Chemnitz 2025 GmbH/ Ernesto Uhlmann

Zum Titelbild

Chemnitz: Kulturhauptstadt Europas 2025

Kennen Sie die Stadt Chemnitz im Osten Deutschlands? Sie wurde zur „Kulturhauptstadt Europas“ für das Jahr 2025 gewählt. Touristisch ist die historische Industriestadt das Eintrittstor ins Erzberggebiet (Weltkulturerbe), aus dem das Weihnachtskunsthandwerk der hölzernen Baumschmuckfiguren entspringt. Besuchen Sie bei Ihrem Chemnitz-Urlaub beispielsweise Annaberg-Buchholz, Welterbestadt des Bergbaus und des weihnachtlichen Holzkunsthandwerks. Es gibt einiges zu bestaunen: von der alten Kirche, in der Bergarbeiter schon seit dem Mittelalter hinkommen, um für Schutz vor den extremen Gefahren des Bergwerks zu beten, bis hin zur Vielzahl an weihnachtlicher Holzkunst, ein Handwerk, das von den Bergarbeitern in der Nebensaison entwickelt wurde. Hier können Sie mit der Erzbergkultur, einer verlorengegangenen Kunsthandwerkskultur, in Berührung kommen und so eine Facette der tiefen, modernen deutschen Kultur kennenlernen. Die Ernennung zur europäischen Kulturhauptstadt 2025 ermöglicht die Chance über dem Traditionellen hinaus mit der gegenwärtigen deutschen Kultur wie z.B. Tanzmusik in Berührung zu kommen.

Offizielle Webseite: https://chemnitz2025.de/

Satoru Ohata
(Manager PR & Communications of German National Tourist Office Tokyo, Mitglied der JDG)

目　次　　ページ／Seite　　INHALT

新年のご挨拶	ペトラ・ジグムント	1	**Grußwort zum Neujahr**	Petra Sigmund
11 月 12 月の協会活動報告		2	**JDG-Aktivitäten im November und Dezember**	
レポート：2024 年クリスマスの集い		7	**Bericht: Weihnachtsfeier 2024**	
ハロープログラム参加レポート	古仲 遥菜	8	**Bericht: Hallo Japan 2024**	Haruna Konaka
青梅宿アートフェスティバル訪問	久保 健	9	**Besuch des Omejuku Art Festivals**	Ken Kubo
マイセンの校長先生来校	河原 美奈子		**Ein Schulleiter aus Meißen besucht unsere Schule**	Minako Kawahara
ベルリナー・ルフト「ベルリンのエジプト芸術と文化―その世界観に浸れる体験」	Dr. ヴェレーナ・マテルナ	10	**Berliner Luft „Ägyptische Kunst und Kultur in Berlin–Erlebnisse zum Eintauchen“**	Dr. Verena Materna
研修生コラム　ウィーンからきた現代のエリザベト「遠いけれど近い」	エリザベト・ハーライター	11	**Kolumne der Praktikantin　Die moderne Elisabeth aus Wien „So fern und doch so nah“**	Elisabeth Harreiter
ドイツ経済の動き 第 91 回	伊﨑 捷治	12	**Tendenz der deutschen Wirtschaft (91)**	Shoji Isaki
お知らせ	事務局	13	**Mitteilungen**	Sekritariat der JDG

Grußwort zum Neujahr
Petra Sigmund
Botschafterin der Bundesrepublik Deutschland

新年のご挨拶
ペトラ・ジグムント
駐日ドイツ連邦共和国大使

読者のみなさまへ

2025年の幕開けを祝ってから数週間が経ちました。年の変わり目は、過ぎ去った年を振り返り、新年への抱負を立てる機会です。みなさまも内省と省察の時を過ごされ、力強く、自信に満ちて新年を迎えられたことを願っております。

現在のような政治的に不安定な時代だからこそ、私たちは確固たる信念を持って行動しなくてはなりません。ウクライナでは人々がいまだにロシアによる侵略戦争に苦しめられ続けています。日本の周辺でも緊張が高まっており、人々は平和と持続的な繁栄を願いつつ、不安を抱きながら過ごしています。

政治が示す指針は今、非常に重要です。ドイツにとって日本との友好関係はこうした指針のひとつです。日独両国は160年以上にわたり、信頼できるパートナー関係を築いてきました。経済、技術、政治、文化の交流は長年にわたり両国の発展に寄与しています。紛争の平和的解決や国際法の遵守にむけた共通の安全保障政策、経済の脱炭素化やデジタル化といった産業政策上の共通の課題、そして、偽情報に対する自由と民主主義に基づく私たちの社会の防衛は、外交政策の面で日独両国をより緊密に結びつけています。

政治レベルでのこうした連携は、相互の信頼関係という基盤があってこそ機能します。文化、地方行政、学術、経済の各レベルで活発な交流が行われなければ、この『根幹』が欠けてしまい、両国関係はその可能性を最大限に発揮することができないでしょう。

日独協会の会員のみなさまは、この『根幹』をなす上で不可欠であり、日独両国の関係における貴重な柱になってくださっています。ドイツ連邦共和国を代表し、みなさまの絶え間ないご尽力に深く感謝いたします。日独協会は多くの会員を擁し、多彩な活動を通じて、日本とドイツの関係を代表する「顔」として、貢献されています。大阪・関西万博が開催される2025年には、日独交流の機会がさらに増すことでしょう。今年、日独交流促進にとってこの上ない好条件が整うことを期待しています。共にこの機会を活かしましょう。

みなさまにとりまして、素晴らしい一年となりますよう、心よりご祈念申し上げます。

駐日ドイツ連邦共和国大使
ペトラ・ジグムント

Liebe Leserinnen und Leser,

Liebe Mitglieder der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Tokyo,
es ist erst wenige Wochen her, da haben wir das Jahr 2025 willkommen geheißen. Wie in jedem Jahreswechsel blicken wir auf das Vergangene und orientieren uns für die Zukunft; es ist ein Moment der Rückbesinnung und der Vergewisserung. Ich hoffe sehr, dass Sie mit Kraft und Zuversicht in dieses neue Jahr starten konnten.
Zuversicht brauchen wir in den politisch unruhigen Zeiten, in denen wir uns gerade befinden. In der Ukraine leiden die Menschen weiter unter dem Angriffskrieg Russlands. Auch in Japans Nachbarschaft nehmen die Konflikte zu und die Menschen machen sich Sorgen, hoffen auf Frieden und anhaltenden Wohlstand.
Politische Orientierungspunkte sind aktuell sehr wichtig. Die Freundschaft zu Japan ist für Deutschland einer dieser Orientierungspunkte. Als verlässliche Partner verbindet uns eine Beziehung mit über 160 Jahren Geschichte. Der wirtschaftliche, technologische, politische und kulturelle Austausch trägt seit vielen Jahren zur Entwicklung unserer Länder bei. Gemeinsame sicherheitspolitische Interessen beim Einsatz für friedliche Konfliktlösung und Respekt des Völkerrechts , gemeinsame industriepolitische Herausforderungen wie die Dekarbonisierung und Digitalisierung unserer Wirtschaft sowie die Verteidigung unserer liberalen, demokratischen Gesellschaften gegen Desinformation lassen uns außenpolitisch eng zusammenrücken.
Diese politische Kooperation funktioniert aber nur auf Basis eines Vertrauensverhältnisses. Ohne die regen Austauschaktivitäten auf kultureller, lokalpolitischer, wissenschaftlicher und wirtschaftlicher Ebene würde das Wurzelwerk fehlen, aufgrund dessen unsere bilateralen Beziehungen ihr ganzes Potential entfalten könnten.
Sie als Mitglieder der Japanisch-Deutschen Gesellschaften sind ein integraler Teil dieses Wurzelwerks und ein unschätzbar wertvoller Träger unserer bilateralen Beziehungen. Als Botschafterin der Bundesrepublik Deutschland bin ich Ihnen daher zu tiefstem Dank für Ihr kontinuierliches Engagement verpflichtet. Sie geben unserer bilateralen Beziehung ein Gesicht und das ganze Gewicht ihrer vielen Mitglieder und Aktivitäten. Im Expo-Jahr 2025 werden sich besonders viele Austauschgelegenheiten zwischen unseren Ländern ergeben. Gemeinsam freuen wir uns in diesem Jahr auf besonders günstige Bedingungen, um den deutsch-japanischen Austausch zu fördern. Lassen Sie uns diese Gelegenheit nutzen.

Mit den besten Wünschen für das neue Jahr,
Petra Sigmund
Botschafterin der Bundesrepublik Deutschland

レポート

ドイツフェスティバル

11/2㈯　11:00 ～ 17:00　都立青山公園会場

Deutschland Festival

Datum: Sa., 2. 11. 2024, 11.00−17.00

Ort: Aoyama Park

エリザベト・ハーライター（日独協会研修生）

11 月 1 日から 4 日まで青山公園でドイツ文化を楽しむお祭り「ドイツフェスティバル」が行われました。イベントはドイツ大使館のサポートのもと、ゲーテ・インスティトゥート東京、ドイツ観光局、及び公益財団法人日独協会も協力し開催されました。ステージプログラム、ワークショップ、色々なブースなど、ドイツについてたくさんの楽しい活動や商品が集いました。

ステージのプログラムにはクラシック音楽から現代のラップまで多様な音楽パフォーマンスがありました。その他にダンスやビールジョッキリフトアップ大会もありました。また、ドイツ語ミニレッスン、ドイツの生活や歴史についての講演、ドイツビールのセミナー、ボードゲーム体験など様々なワークショップが開催されました。

ドイツのパン屋（私もすぐに自分用のミッシュブロートを買いました！）、ドイツ関連の本屋、Dallmeyer、お菓子屋などドイツ関係の製品を売る出店がたくさんありました。ソーセージ、グリルした肉、プレッツェル、シュペッツレやビールなどのドイツの飲食物もたくさんありました。

もちろん、日独協会は今年のドイツフェスティバルにも参加しました。11 月 2 日㈯に悪い天気にもかかわらずたくさんの人が協会のブースに来てくれて、本当に嬉しかったです。日独ユースネットワークの勤勉なボランティアたちもブースの活動を手伝ってくれました。ウムラウトくんエコバック（黒、赤、金、緑）やクリアファイルといったオリジナルグッズも販売しました。そのほかに、ドイツの古い文字ジュッターリーンを書く体験イベントも行いました。イベントのためにデザインしたハガキに、参加者は 100 年前の文字を使って昔のドイツ人のように自分の名前を書くことができました。参加者は、自分の日本語の名前を意味に基づいてドイツ語に翻訳してもらうこともできました。（田中さんは Herr Reisfeldmitte のようになりました。）

ドイツフェスティバル開催の 4 日間のあいだ協会は 1 日だけ出店しましたが、ドイツに興味がある人々と会ったり話したりできて楽しかったです。

獨協大学主催の講演会
「ドイツで働くためには？」に登壇して

11/2㈯　15:00 ～ 17:00　獨協大学

Teilnahme an der Vorlesung „Arbeiten in Deutschland“ an der Dokkyo Universität

Datum: Sa., 2. 11. 2024, 15.00−17.00

Ort: Dokkyo Universität

木田 宏海（日独協会理事）

今年度法人会員になられた獨協大学の依頼を受け、昨年 11 月 2 日㈯に獨協大学の大学祭「雄飛祭」において「ドイツで働くためには？」の講演会に参加しました。講演には樋上評議員、柚岡常務理事、佐藤理事、そして私の 4 名が講演者として登壇。全員長年のドイツ勤務経験があり、学生に向けて実践的かつ具体的な情報を共有しました。

ドイツ語を学ぶ学生の中には、将来的にドイツで働くことやドイツ語を活かしたキャリア形成を目指す人も多い一方で、実際の選択肢やリスク、必要なスキルについて具体的に知る機会が限られています。そのため、以下のような内容について情報提供を行いました。

1. 就職パターンの紹介
- ドイツ語圏への就職パターンや実例
- ドイツで働くために必要なスキルや語学力
- 職業観や就職事情の日本とドイツの違い
- ドイツで働く上での現状や課題
- 日本企業の駐在派遣、現地採用の事例紹介
- 必要スキル（英語、ドイツ語、業務経験）
- 待遇イメージと求められるビジネスレベル

2. ドイツで働くための準備
- 卒業後すぐの就職ではなく、1 年間のドイツ留学やインターンシップ経験の重要性を強調
- 自分に合った職種・働き方のルート開拓を推奨

3. ドイツの日系企業の現状
- 約 2 千社が進出している現状
- 人件費削減による駐在員の減少と、ナショナルスタッフによる現地化
- 経理スキルの有用性

4. デュッセルドルフでの就職事情
- 労働ビザ取得の容易さ
- 日系人材派遣会社への登録増加

講演には約 50 名の学生が参加し、熱心に耳を傾け、多くのメモを取る姿が印象的でした。講演後も質問が絶えず、学生の高い関心と意欲が伺えました。今回の講演を通じて、獨協大学との連携をさらに強化する基盤が築かれました。今後も学生がドイツでのキャリアを具体的に考えられるよう、情報提供や支援を続けていきたいと考えています。

日独間のクロスボーダー年金課税セミナー
11/11㈪　18:00 ～ 19:30
日独協会セミナールーム
Seminar zur Cross-border Rentenbesteuerung zwischen Deutschland und Japan
Datum: Mo., 11. 11. 2024, 18.00−19.30
Ort: Seminarraum der JDG

森 宏之（日独協会理事）

11 月 11 日㈪、当協会セミナールームにて掲題の会員限定セミナーが開催され、10 数名の参加者が集まりました。かつてドイツに赴任・勤務し、帰国後ドイツの年金を受給されている方から、「最近ドイツ税務当局から、年金に課税するという通知が来たが、どうすれば良いのか分からない」という声を聞くことがしばしばあり、この問題ではおそらく日本で一番詳しい池田良一先生（PwC デュッセルドルフにて長年日系企業向け税務コンサル提供、2022 年より拠点を日本に移す）にお越しいただき、ポイントを解説して頂きました。

この課税問題はそもそも 2017 年 1 月 1 日付けで発効した（新）日独租税条約によるもので、この条約改正自体はドイツの現地法人から日本の親会社への配当が免税扱いとなる等、大変ポジティブなものでしたが、一方課税強化を含む改正内容もいくつかあり、その一つが年金課税に関するものでした。ドイツで日本の年金を受給している人は 2017 年から源泉課税され手取りが少し減ったのですが、逆のケース（日本でドイツの年金を受給している場合）では 2017 年以降も源泉課税されることなく支払われていました。但しそうした年金支払いデータは、ノイブランデンブルグ税務署（メクレンブルク・フォアポメルン州）に集められ、同税務署から順次、課税に関する通知が日本の受給者に送られて来ている状況です。日本の年金受給者は、年度毎に当該税務署に税務申告を行い、査定書に基づき納税するというプロセスとなります。これに伴い二重課税や時効の問題など様々な問題が生じており、池田先生に分かりやすく説明頂きました。またセミナー後に参加者に配布された資料ではドイツの寡婦年金制度についても詳しく解説頂いています。参加者からは、大変有意義なセミナーであったと好評で、中にはまだ年金受給までしばらく年数があるが、今から勉強できて良かったと感想を述べられる方もいました。

当協会としては、今後このセミナーを非会員にも広げて継続していく予定ですので、今回参加できなかった方も、次回は是非ともご参加下さい。

特別なワイン会
「ドイツ・オーストリアの秋の味覚、フェーダーヴァイサー／シュトルムを味わおう 8」
11/23㈯　15:00 ～ 16:30
日独協会セミナールーム
Stürmisches Weinfest
Datum: Sa., 23. 11. 2024, 15.00−16.30
Ort: Seminarraum der JDG

エリザベト・ハーライター（日独協会研修生）

11 月 23 日にフェーダーヴァイサー（オーストリア人の私はシュトルムと呼びます）という特別なワインのイベントを開催しました。明るい土曜日の午後、40 名の会員、日独協会のスタッフ、そして、お手伝いしてくださる会員スタッフが日独協会の事務局にフェーダーヴァイサーを飲むために集まりました。

フェーダーヴァイサー（白）とフェーダーローター（ロゼ）は日本で生産されて、月山トラヤワイナリーから提供されました。この飲物はまだ発酵中で、瓶内に多くの圧力がかかっているため、輸出や貯蔵が難しく、通常はドイツ、スイスやオーストリアだけで飲むことができます。ですから、本当に特別なワイン会でした。毎年秋にオーストリアのシュトルムを飲む私は、この日本のフェーダーヴァイサーは本当に懐かしい味だと感じました。

もちろん、フェーダーヴァイサーとフェーダーローターだけでなくて、本場ドイツ仕込みの手作りパン教室 PS パパン さんが作った美味しいドイツパンとツヴィーベルクーヘンも一緒に楽しみました。

私はオーストリア人なので、参加者にオーストリアのシュトルムとワイン文化を紹介いたしました。フェーダーヴァイサーとの違い（名前だけです）、名前の意味（シュトルムは「嵐」という意味があり、飲みすぎれば、頭の中が嵐みたいになります）、シュトルムの正しい飲み方（左手でグラスマグを持って相手のグラスと打合わせて、「Mahlzeit」や「Krixikraxi」と言います）ウィーンとワインの強い結びつきやシュトルムを飲むために一番人気な場所、つまりホイリゲ（伝統的な酒場）などについて話しました。

これ程たくさんの人々の前で話すのは少し緊張しましたが、無事にプレゼンテーションを終え、参加者に楽しんでいただけたと思います。一緒にオーストリアの方法でカンパイするのはとても人気でした。賑やかな雰囲気の中で特別なワインを楽しむことができました。

ドイツ語講習会
2024 年度下半期コース
火～日曜日
Deutschkurse in der JDG
Oktober 2024 - März 2025
jeden Di.-So.

ドイツ語圏文化セミナー 165
「プロイセン視点から『超約 ドイツの歴史』を「跳躍」してみる」
11/8 ㈮　19:00 ～ 21:00
日独協会セミナールーム（対面＋オンライン）
Seminar zum Buch „The Shortest History of Germany“ aus preußischer Sicht
Datum: Fr., 8. 11. 2024, 19.00-21.00
Ort: Seminarraum der JDG (+Online)
参加者約 70 名（そのうち約 20 名が対面参加）

昨年夏、ジェームズ･ホーズ著『超約 ドイツの歴史』（東京書籍、2024 年）の翻訳書が出版されたことを記念して、今回のセミナーが企画されました。本の監訳者である柳原伸洋先生と、ドイツ近世史（ブランデンブルク＝プロイセン史）の若手研究者である早稲田大学大学院の藤井未琴さんにお話いただきました。

この本はイギリスやドイツでベストセラーとなり、全世界では 50 万部が売れているそうですが、その特徴として、これまで西からの目線でドイツの東部を捉えるのが主流であったのに対し、この本ではドイツの西と東をそれぞれ主役と考え、東を主役とすると何が見えてくるか、という視点が取り入れられているとのこと。そこでこのセミナーでは特にプロイセンに焦点を当て、同国の成り立ちから勃興までの歴史を興味深いエピソードを交えながら柳原先生に俯瞰頂き、藤井さんは自己の研究テーマから、フリードリッヒ・ヴィルヘルム大選帝侯がポーランド共和国の一公国であったブランデンブルグ＝プロイセンの主権を獲得していくプロセスを詳しく説明されました。

鉄血宰相ビスマルクと軍隊のイメージが強いプロイセンですが、実は飛び地を繋げていく形で国土を広げてきた「変体国家」であったとは意外でした。皆さんも一度プロイセン目線でドイツの歴史をたどってみては如何でしょうか。　（森 宏之）

柳原伸洋先生と藤井未琴さんのお話に耳を傾ける参加者達

第 4 回 ドイツの詩をドイツ語で朗読する集い
11/14 ㈭　14:30 ～ 16:30
ベヒシュタイン・セントラム 東京ザール
Lesung deutscher Gedichte auf Deutsch
Datum: Do., 14. 11. 2024, 14.30-16.30
Ort: C. Bechstein Centrum Tokyo

有楽町日比谷マリンビル地下 1 階にある、ドイツの高級ピアノメーカー「ベヒシュタイン」の「ベヒシュタイン 東京ザール」で開催された「ドイツの詩をドイツ語で朗読する集い」に、聴衆として参加しました。

集いは主宰者の藤田明氏（聖学院大学名誉教授・当協会評議員）の開会のお言葉と、この「集い」の説明から始まり、藤田先生を含む 10 名の方々がドイツ語の発声法とリズムで朗読され、ホールの響きの良さも相まって、聴衆の皆様は一様に聞き惚れておられました。

朗読された詩はゲーテ、ハイネ、アイヒェンドルフ等で、ミュラーの「菩提樹」を 3 名の方が交代で朗読される等、アイディアあふれる発表もありました。

詩の朗読は、活字で鑑賞するものとは違った深い趣がありますが、日本では、ヨーロッパの様な朗読会はあまり普及しておらず、詩の本当の良さを理解するためにも、このような企画はもっと推進されてしかるべきか、と感じました。
その後、お茶とお菓子を頂き、感想を述べあい、次回の開催を約し、和やかに散会しました。因みに、次回の集いは 3 月 3 日の予定とのことです。　（柴田 明）

「ドイツの詩をドイツ語で朗読する集い」にて

ドイツ語圏文化セミナー 166
ベルリンで暮らす、働く 第２弾 ～四者四様、日本人ベルリナーたちのホンネ de 座談会～
11/15 ㈮　19:00 ～ 21:00
Rundgespräch „Leben und Arbeiten in Berlin“ 2
Datum: Fr., 15. 11. 2024, 19.00-21.00

グローバル化に伴い、海外移住や海外での就職も人生の選択肢として考える人が増えてきました。協会では 2023 年 11 月にも同テーマのイベントを行い、ソフトウェアエンジニアとしてベルリンで働く所親宏さんに現地での職探しや仕事文化についてご自身の体験を踏まえた具体的なお話をしていただきましたが、今回は所さんを含む 4 名の日本人ベルリナーに登壇いただき、「ベルリンでの暮らしと仕事」をテーマに座談会形式でお話いただきました。司会進行は、当協会のユース会員であり、ご自身もドイツ就職に関心を持たれている司徒友依さんが務

められました。

4 名の登壇者は、現地企業で働くソフトウェアエンジニア、保育士、日本酒 / 焼酎のインポーター、フリーランスの映像ディレクターと全く異なるジャンルで活躍しており、それぞれの方の職場の雰囲気、日本とドイツでの評価ポイントの違い、移住までのそれぞれの経緯等、ドイツ就職を考えている方には非常に参考になる内容だったようです。

今後もドイツで実際に働いている方の声が聴ける機会を作っていきたいと考えています。

ドイツ時事問題研究会 第 104 回

11/16 (土)　15:00 ～ 17:00

Studiengruppe „Deutschland aktuell“ (104)

Datum: Sa., 16. 11. 24, 15.00-17.00

11 月の「主なトピックス」では、①経済の低迷を背景にショルツ首相（SPD）やリントナー財政相（FDP）がそれぞれ経済団体に自らの政策を訴え、ハーベック経済相（緑の党）が独自に 10％の投資補助金の供与を打ち出すなど、分裂を深め、瓦解に至るまでの連立政権の動向、②戸籍役場に届け出るだけで性別、ファーストネームを変更できる「自己決定法」の発効、③金属･電機産業賃上げ交渉がトップバッターとなる北部沿岸地域等で 25 か月を対象に 5.1% の引き上げで妥結、③経済動向をウォッチし、必要な対策を政府に勧告する経済諮問委員会（五賢人委員会）が経済の不振の要因として景気変動と構造問題の双方を挙げ、年金制度の改革、社会保障費の抑制、自動車・鉄鋼等の伝統産業よりも将来産業の推進などを勧告。2024 年の経済成長率をマイナス 0.1%、2025 年はプラス 0.4% と予測、などについて報告、質疑応答を行った。

「今月のテーマ」では、2025 年 2 月 23 日と決定した連邦議会繰り上げ選挙までの懸案事項、諸日程、各政党の準備状況･主な政策などについて、伊崎から報告した。

（伊﨑 捷治）

シュプラッハトレッフ（日独言語交換会）

11/16 (土)　19:00 ～ 20:40

Sprachtreff

Datum: Sa., 16. 11. 24, 19.00-20.40

参加者約 20 名。最初に全体で会の簡単な説明をおこなったあと、レベルごとの小グループにわかれて言語交換をしました。入門から初級レベルの方々の会話の活性化に役立つよう、事前にテーマや語彙リストを送っていますが、今回のテーマは、①時間の切り替え（Zeitumstellung）「夏時間についてどう思いますか？」と ②冬の温かい食べ物（Warmes Essen in Winter）「冬の温かい食べ物を紹介しませんか？」でした。

毎回、直前のキャンセルが出て、日独の母語話者数を同じようにグループ分けすることに担当者は苦労しますが、終了後のアンケートには、「とても良い雰囲気、良いテーマで話すことができた」というポジティブな感想を多くいただきました。

Sprachtreff ではいつでも小グループの会話をサポートしてくださるボランティアを募集しています。ご興味のある方はぜひご連絡ください。

独逸塾

11/18 (月)　19:00 ～ 21:00

Gesprächskreis: Neuigkeiten aus Deutschland

Datum: Mo., 18. 11. 24, 19.00-21.00

参加人数 17 名

1．テキストは 2024 年 3 月 27 日の MDR（中部ドイツ放送）の記事 „Armut in Deutschland auf hohem Niveau-Kinderarmut erreicht Rekordwert“

1）ドイツの貧困率は 2022 年に 1400 万人となり全人口の 16.8％を記録した。

2）子どもの貧困率は子供の人口の 21.8％を記録。

3）地域的にはチューリンゲン州とザクセン＝アンハルト州がドイツの平均を上回っており、中でもザクセン＝アンハルト州の都市ハレは 21.9％と最も高くアンハルト＝ビッターフェルト郡のヴィッテンベルクは 16.8％で最も低い。

2．テキストは2024年9月7日シュピーゲル誌の „Schockwellen aus Wolfsburg“

1）フォルクスワーゲン社（以下 VW）は中国の EV 車との競争激化で業績が悪化。国内工場 10 か所のうち少なくとも 3 か所を閉鎖し、大幅人員削減等のリストラ計画を発表した。

2）VW は 30 年間にわたり従業員に雇用の保証を約束してきたことを解消した。

3）開催された Betriebsrat（労働者委員会）では委員長 Daniela Cavallo が約 2 万 5 千人の委員から非難、叱責され大荒れ集会となった。

4）人件費および電力料金の高騰でドイツに拠点を構えるリスクにさらされている。自動車産業だけでなく化学、機械建設業もしかりである。

5）排気ガスの不正ソフト問題を起こして会社に 3.300 億ユーロの損害を与えた元会長 Winterkorn の裁判が始まっている。

ドイツ語の解釈をめぐり活発に議論が交わされた。

（森永 成一郎）

懇談会サロン

「ニーチェに関する一考察」

11/25 (月)　18:00 ～ 19:30

日独協会セミナールーム

Gesprächssalon: Eine Studie über Nietzsche

Datum: Mo., 25. 11. 24, 18.00-19.30

Ort: Seminarraum der JDG

講師：中村 憲治先生

参加者：16 名

「ニーチェに関する一考察」についてご講演頂いた中村憲治先生より直接要旨を伺いました。

„Der Mensch ist etwas, das überwunden werden soll.“「人間とは克服されるべきなにものかである。」というニーチェ

の言葉があります。又、ニヒリズムはあらゆるものの前提であるとも言います。それは、既成秩序から解放された「自由な精神」の発現という肯定的な性格を持っているとニーチェは言います。そして、ニヒリズムの積極的な克服へ向かおうとするニーチェは、一切事物の永遠回帰、「尽きることなく生み出す生の意志」という意味での「力への意志」、この二つの思想と「超人」思想は結びつくことによってニヒリズムを転回させ人間の生の大いなる肯定へと向かうと言います。そして「人間は動物と超人との間に張り渡された一本の綱なのだ―深淵のうえにかかる綱なのだ」とも言います。つまり人間は無限に自己超克出来るが、超人にはなれない、ということになり、これは浄土真宗で言う「他力本願」思想ととてもよく似ています。人生は修行し続けることに、言いかえるなら、自己超克し続けることに意義がある、ということではないでしょうか。だとすればニーチェの「超人」思想と「他力本願」思想が酷似していると主張しても、許されると思うのです。　（佐藤 勝彦）

シュプラッハトレッフ（日独言語交換会）

12/14 ㈯　19:00 ～ 20:40

Sprachtreff

Datum: Sa., 14. 12. 24, 19.00-20.40

参加者約 40 名。寒くなってきたせいか、体調を崩されて開催直前にキャンセルされた方が多かったです。小グループの会話のサポーターの数も少なく、どうしようかと心配していましたが、数名の方が急遽手伝ってくださることになり、無事開催することができました。今回のテーマは「年末年始の過ごし方」でした。日本もドイツも年末年始はイベントが多く忙しい時期ですから、このテーマでは様々なトピックで会話を楽しむことができたようです。小グループの会話をサポートしてくださっているのは協会スタッフ以外はボランティアの方々です。毎回、この大変な役目を担ってくださっているサポーターの方々に心から感謝いたします。

懇談会サロン
「世界初総合電機企業 Siemens 社を支える人々はどのように育成されたか？」

12/16 ㈪　18:00 ～ 19:30

日独協会セミナールーム

Gesprächssalon: Wie sind die Menschen hinter Siemens entwickelt worden?

Datum: Mo., 16. 12. 24, 18.00-19.30

Ort: Seminarraum der JDG

講師：田中洋子先生（筑波大学名誉教授）

参加者 16 名

今回の田中洋子先生のお話は、主軸にドイツ企業の人材育成を置き、主たる論点として次の 2 点を挙げられた。①創業 177 年の超長寿企業でありながら、新技術・新分野でイノベーションを起こしながら企業として持続的に発展しているジーメンス社の実力の背景として、どういう能力を持ついかなる人々が社を担ったのか、こうした人々を持続的に育成・養成する仕組みは歴史的にいかにして形成されたのか。②ドイツ企業はジョブ型と言い切って良いのか。ドイツ企業は「欧米はジョブ型」という類型とは異なる上、ドイツの大企業には企業内の人材育成によりメンバーを獲得して行く特徴がありメンバーシップ型の要素が強い。では、ドイツ企業は何型と呼べるのでしょうか。　（佐藤 勝彦）

独逸塾

12/16 ㈪　19:00 ～ 21:00

Gesprächskreis: Neuigkeiten aus Deutschland

Datum: Mo., 16. 12. 24, 19.00-21.00

参加者 18 名。

１．テキストは 2024 年 9 月 7 日のシュピーゲル誌の記事 „Schockwellen aus Wolfsburg“ で、フォルクスワーゲン社（以下 VW）の苦境を述べた記事である。

1）Winterkorn 元会長時代に起きたディーゼルスキャンダル事件で VW の名声に傷がついた。

2）ディーゼル車の売り上げ不振で VW は大幅に方向転換を図り電気自動車に注力し 2025 年まで世界市場でリーディング会社になるべく多大な投資を実施した。しかしライバルの中国の BYD はバッテリー等の製造コストを VW より 20％安くできるようになり、新車の開発期間を VW に比べて 25％短縮したことで VW の電気自動車の競争力が低下してきた。

3）VW の高い人件費

事例として、工場の警備員に手当を含め月 6,000 ユーロ（約 90 万円）を税込みで支払っている。上級管理職には公用車 2 台が支給され家族も使用可能。

４）VW の対応策

VW は国内の 10 工場のうち 3 工場の閉鎖および給与カットを含む削減策を発表した。

５）労働者代表委員会の議長 Daniella Cavallo は IG Metall の 7.5％の賃上げに同調していたものの譲歩して工場閉鎖をなくす代わり賃上げゼロを主張。

６）今後の政策投資の在り方

古い自動車産業でなく有望な新興企業に目を向けるべきである。たとえばミュンヘンの FLIX は企業の観光サービス等を提供する会社である。

ドイツ語の Freiansprüch 等の解釈をめぐり活発に議論が交わされた。　（森永 成一郎）

ドイツ時事問題研究会 第 105 回

12/21 ㈯　15:00 ～ 17:00

Studiengruppe „Deutschland aktuell“ (105)

Datum: Sa., 21. 12. 24, 15.00-17.00

12 月の開催内容については 12 頁の「ドイツ経済の動き」に掲載していますので、そちらをご覧ください。

レポート

2024年クリスマスの集い

12/2（月）19:00 ～ 21:00　日立目白クラブ（東京都新宿区下落合 2-13-28）

Weihnachtsfeier

Datum: Mo., 2. 12. 2024, 19.00-21.00 Ort: Hitachi Mejiro Club

森 宏之（日独協会理事）

12 月 2 日（月）19 時より当協会主催「クリスマスの集い」が、昨年に続き日立目白クラブ様の趣ある会場をお借りし、8 月に着任されたジグムント大使、レッフェルハート公使他のご来賓と 100 名を超える参加者をお迎えして盛大に開催されました。

まず東原会長より主催者を代表しての挨拶があり、緊張の度合いを深める国際情勢の中での日独関係の重要性、そこで当協会が果たす役割と若い人たちへの期待を述べられ、続いてジグムント大使は返礼スピーチの中で初めて経験する日本のクリスマスの印象と、各地の日独協会との交流について言及されました。10 月にベルリンで開催された「日独パートナーシップデイズ 2024」で演奏されたピアニスト木村舞美子さんによるブラームス間奏曲の演奏、恵谷副会長による乾杯の発声に続きビュッフェタイムとなり、会場は一気に和やかな雰囲気に包まれました。会の後半では「樅の木」「きよしこの夜」の合唱、木村さんによるシューベルト＝リスト「アヴェマリア」の演奏、恒例の福引が行われ、大盛り上がりのうちに名残惜しくもお開きとなりました。以下参加者の声を紹介します。

「いつもは画面越しのドイツ語講座のクラスメイトや事務局の方とお会いできるかも！」と思い立って、初めて名古屋から参加させていただきました。美しい会場で素敵な方々と交流することができ、想像を超えた楽しい時間となりました。

同じく初参加の、別のドイツ語講座で学ぶ会員の方とは、お互いの授業の様子やドイツ語学習の苦労話で盛り上がりました。また、司会のお 2 人や通訳の方をはじめ、日独両言語を流暢にあやつる方々の存在には、大変刺激を受けました。言語の違いをモノともせずお相手の言葉でコミュニケーションを取る方々には､「私もそうなりたい」と思わせるカッコよさがあり、ドイツ語学習のモチベーションが増えました。

大使のご挨拶のドイツ語が少しは聞き取れたり、研修生 Elisabeth さんとウィーンの話ができたり、気付けばテーブル全員 FEILER のハンカチを持っていたり、福引に当たったり、お土産をいただいたり、日独をつなぐ多様なお仕事の存在に触れたり、美しいピアノ演奏に耳を傾けたり、合唱が楽しかったり…、思い出のつきないひと時となりました。

安岡 佳奈（日独協会会員）

目白日立クラブでの「クリスマスの集い」は、温かい時間だった。

☆**合唱：**印象に残ったのは、音楽。ピアノの木村さんの伴奏で歌ったもみの木の歌である。とても懐かしいと感じた。実は、パートナーきっかけで出逢ったドイツ・リートの先生のもとで、わたしも合唱を習うようになった。声の響きや呼吸が合うのはとても楽しい。ドイツ語の O ～ Tannen Baum を歌ったことがあった。目白では初めてだったが、なぜか懐かしいと感じる、そんな不思議な温かな時間だった。

☆**じっくり祝う：**普段、日本で過ごすクリスマスは、せわしない（いそがしい）。その理由は、おそらく、25 日のクリスマス当日にローストチキンを食べ、31 日には年越しそば、1 日からはお雑煮にお餅と 1 週間にさまざまな行事が詰め込まれているからだ。少し窮屈に感じる。 反対に、12 月のはじめ、アドベント開始時から、ゆっくりとお祝いができ、心地よかった。

☆**まとめ、国際交流の種：**どんな服装で行くか、次回は和装をしていくのもいいなと感じた。日本にいながら、西洋の行事をドイツ人、オーストリア人とともにお祝いできる、小さな国際交流の種だと思う。 そもそもわたしと日独交流の接点は、2024 年 10 月にベルリンで行われた、パートナーシップデイズが最初である。まだ始まったばかり。

☆**小話：**また、少し「にくい」と感じたこともあった。出口に用意されたプレゼントもさることながら､「ウームラウトくん」のトートバッグが売られていた場所である。行きは入口、帰りは出口のすぐ脇。つい立ち止まってしまう場所だ。心地よい時間を過ごした後、帰りにひとつ買い物をしてから家に帰りたい、そんな主婦（夫）心をくすぐった。一家にひとつと思って買ったのは少し安価な黒の方だった。もう一つ残った金色のトートバッグはその後､誰かのお家に旅立ったのか､すこし気になるところだ。今後とも目が離せない。30 年、50 年後にも日独交流を、じっくりと続けていきたい。

中野 裕史（日独協会会員）